

※このメールは、MIT・エナジー・ビジョン社の視察セミナーにご参加頂いた方々に BCC でお送りしています。

※今後は四半期に 1 度程度、お知らせメールをお送りしたいと考えています。

※お手数ですが、ご迷惑に思われる方は、「送付不要」とだけ記して、送信者に返信していただけますと送付リストから外しますので、よろしくお願いいたします。

早春の候、貴社ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。日頃は格別のお引き立てをいただき、ありがたく御礼申し上げます。

とまあ、お固い挨拶はこれぐらいにして。

今回は、MIT メンバー 3 者から、皆さまに最近のドイツ・スイスのエネルギーなどの動向について、と各種の告知についてメールをお送りします。

今回は、MIT の並び順で、村上→池田→滝川という順で。最後までお楽しみくださいね。

MIT: 村上

ドイツ・再生可能エネルギーは一旦足踏みか？

ドイツでは 2013 年 12 月に保守と中道左派による大連立政権(第三次メルケル政権)がスタートしました。メルケル首相(保守、キリスト教民主同盟)が首相再任時のインタビューで、「新政権が最初に着手し、迅速に改善すべき点は、エネルギーヴェンデです」と発言したように、このテーマについて待ったなしの対応の必要性を政治は認識しています。

ただし、エネルギーヴェンデ(エネルギー大転換:2022 年までに脱原発、50 年までに脱化石を果たし、再生可能エネルギーによる社会を実現する)の改革と新政権が言っても、省エネや熱、交通などのエネルギー部門については、これまでに成果が上がっている政策の継続と微調整に留まります。緊急的な改善策が必要だと言われているのは電力部門で、その中でも再生可能エネルギーの固定価格買取制度(FIT に以下略)の法改正にほぼ限定されます(2014 年 8 月改正法の施行予定)。

政権成立後、迅速な議論を経て、経済相、エネルギー相を兼任するガブリエル副首相(中道左派、社会民主党)が政府の新方針を 2014 年 1 月に発表しています:

1. これ以上の FIT 賦課金(サーチャージ)の上昇を招かないためにも、再生可能エネルギーの新設を抑制する。これは新設設備における買取価格の大幅な低下と買取制度の適用の厳格化によって実現する。
2. 大規模事業所に対する賦課金の減免措置の適用の見直しを検討する。

この 2 点が主なもので、方針通りに法改正が施行されるなら、これまで急速に増加してきたドイツの再生可能エネルギー発電は、一時停滞することになることでしょう。しかしこれらの対策では現状抱える問題の改善はない、単なる時間稼ぎの先送りだ、とすでに多くの専門家から批判されてもいます。

そして4月2日、ドイツで3日間にわたるエネルギーサミットが開催されました。これまで連邦の方針(再生可能エネルギーに大幅なブレーキ)と各州の希望方針(それぞれの州が電力を自給、かつ輸出も目論む)が食い違っていたものを、大まかには統一、合意がなされました。太陽光発電については、これまでの連邦の主張通り、買い取り価格を今後も急落させ、かつ、設置に天井をもうける。陸上風力については、設置天井を州側の規模通り大きめに設定する。洋上風力発電については、買い取り価格の急落度合いをゆるめ、多少は推進してゆく。そんな折衷案となりました。

どちらにしても、ドイツは過去10年間の再生可能エネルギーの推進によって、電力設備の過剰、発電過剰に悩むようになってきました。今後、2022年までに順次廃炉される原発に手出しはできないと考えられるため、老朽化した褐炭・石炭火力をどこまで政治的に廃炉させ、過剰供給を解消するのか、このポイントの実行如何によって、今後、そもそもこれまでのようなスピードで再生可能エネルギーの電力部門を推進させることができるのか、そんなことが決まりそうな感じです。

お知らせ

★MIT 視察セミナーNo.8(2015)の日程のお知らせ

2014年のMIT視察セミナーNo.6(10月5日~11日)への参加希望者がほぼ定員に達しました。あと、1~2名のご参加は受け付けます。ご希望の方は、お早めにご連絡くださいませ。

今回ご参加頂けなかった皆様のために、No.6と同じような内容で2015年2月1日~7日にMIT視察セミナーNo.8を開催することに致しました。後日、プログラムをホームページにアップします。ご関心のある方はこちらもお早めにご連絡ください。

info@mit-energy-vision.com

MIT:池田

イノベーションは現場から

先日フライブルク市のフラウエンホーファー・ソーラーエネルギーシステム研究所(Fraunhofer ISE)を訪問しました。フラウエンホーファーグループは、従業員数は23万人、ヨーロッパ最大の応用研究機関で、様々な領域で、企業の経済活動や社会に貢献しています。フラウエンホーファー・ソーラーエネルギーシステム研究所(Fraunhofer ISE)は、環境首都フライブルクにあり、従業員1300人を抱えています。

企業や行政などとの活発な共同作業により、実用的な研究が行われていますが、この研究所は、10年ほど前から、現場の「職人」との交流も密に行っています。南バーデン地域をエリアとするフライブルク手工業会議所との共同作業です。「現場の職人から、研究者が思いつかないアイデアや改善点が出てくる」とのこと。

私の専門は、森林と木材ですが、この2つの分野でも、イノベーションの多くが現場から生まれています。恒続林の理想的な形態とされる択伐林(複層林)の起源は、ドイツやスイスの山岳地域の農家林にあります。自分の子供や孫の世代でも、自分と同じように森から収益を得られるように、という次世代への思いやりから、いつでも太い木が存在し、絶えず稚樹が更新している森の造成、維持の手法が生み出されました。

研究者は、いくつかのそのような事例をもとに、学術的にその手法を体系づけていきました。建築で使用される木材製品も、ここ20年ほどで、様々なイノベーションが生まれています。これらの多くも現場の需要や問題意識から生まれています。狭い場所で建設しなければならないという問題から、積み木型の工法が生まれ、ひび割れや曲がりを防ぎたい、大型建築を木造で行いたい、という需要から集成材が生まれ、木でコンクリートのような建設をしたい、という需要からCLT材が生まれています。

私たちが提供している視察セミナーも、現場を重視しています。見て体験してもらうことによって初めて、深い理解や、新しいひらめきが得られます。

お知らせ

★SSS社のセミナーについて

池田が関わるスマート・サステイナブル・ソリューションズ社において、森林林業、木材産産業をテーマに、本年度、2つの視察セミナーを開催します。専門家や業界の方々だけでなく、広く一般の方々の参加も歓迎します。現場視察をたくさん入れたプログラムで、持続可能な森林林業と地域に富をもたらす地域木材産産業のあり方を、解りやすく解説します。お問い合わせは以下のホームページから。

<http://www.nippon-forest-vision.jp/seminar.html>

MIT: 滝川

100 万年前から 100 万年後を考える展示

スイスにも、通常より2~4週間早く、春が訪れました。3月末の暖かな日曜日に、私たちは北東スイスのシャフハウゼン市にある州立博物館を訪れました。評判になっている、放射性廃棄物の最終処分場に関する特別展示「長時間、最終処分場」を見学するためです。放射性廃棄物の最終処分場というテーマを主に文化人類史、自然史という視点から展開した展示です。特に100万年という時間を、地域の歴史の中で具体的に考え、体で感じさせようとする分かり易い展示方法が興味深かったです。

展示の中では、地質学や核開発、原子力利用や反対運動の歴史などを紹介した後、スイスで現在考えられている150年間の地層処分の基本計画が説明されています。スイスでは、原発を運営する大手電力が国と共同で運営する組合Nagraが、放射性廃棄物の最終処分に責任を持っています。予定地は決まっていません。基本計画では、用地決定・建設の後、2050~65年頃に地下移送し、その後50年間は観察期間、そうして2112年~2117

年に封込めという計画になっています。最終的に 2118 年には、処分場の長期監視の責任は Nagra からスイス連邦へ移譲(!)されるそうです。

展示では、100~150 年がどれほどの社会的変化をもたらすものか具体的に表すために、150 年前の技術や、欧州内の国境の変化を振り返ります。そもそも、2118 年にも Nagra が存在しているか、非常に疑わしいところです。長期間の保存には「永続する組織」が必要であり、それがいかに難しいことかを展示は示していました。

特別展示の一番の見せ場は、50m の細長いトンネルのような通路です。スイスでは、高レベル放射性廃棄物は 100 万年安全に貯蔵しなければならないことになっています。100 万年という時間を 50m に縮小し、右側に過去、左側に未来を示します。ショッキングなのは、この地域の人類の歴史がはじめの 75 cm (1.5 万年分) で終わってしまうことです。それ以上に遡って行くと、骨や石器などの小さな展示物がありますが、人類史に関わる展示物は 50 万年のところで途絶えます。そのあとの 50 万年分の展示キャビンには、地質学的な図が収められているだけで、何度もの氷河期がこの地に訪れた様子を表しています。対して、未来のキャビンには、放射性物質の線量低減のグラフが収められています。しかし、100 万年たってもほとんど線量が減らない物質もあるのに驚きました。

展示の最後は、1 万年後の人たちに誤解されないように最終処分場をマーキングする方法という難題で締めくくられています。スイスでは高レベル放射性廃棄物の最終処分地を「持続的に」、つまり 1 万年くらいを目安にマーキングしないといけない法律になっています。展示の中では最後まで、最終処分の問題についてどうすべきかへの答えは出されていません。ただ、これを見た人は誰もが、未来の世代に対してのつけをこれ以上増やさないために、すぐにでも放射性廃棄物を増やすことは止めるべきだと思ったでしょう。

お知らせ

★6 月にソーラーコンプレックス社社長の講演会

南ドイツの市民が作った再生可能エネルギー会社「ソーラーコンプレックス」。同社の設立者の一人で、取締役であるベネ・ミュラーさんが 6 月に日本で講演を行います。日付、場所は下記の通りになっております。会場・時間・公開等については未だ主催者の皆さまと調整中ですが、ご関心のある方は MIT 滝川までご一報ください。詳細が決まり次第、ご報告させていただきます。

takigawa@mit-energy-vision.com

6 月 11 日(水)東京都

6 月 12 日(木)山口市

6 月 20 日(金)盛岡市

6 月 21 日(土)秋田県

6 月 22 日(日)福島市